

社会科学の臨界点

松 浦 雄 介

認識とは凶暴な認識形而上学的gnoseological "主体"による死せる"客体"の占有ではなく、人間諸存在の生ける倫理的コミュニケーションである。P・フロレンスキー

1 はじめに

かつてアイザイア・バーリンは、「ナショナリズム—過去における無視と現在の強さ」(1978) (バーリン選集1所収)と題する論文で、それが過去二世紀、学者による注意をほとんど引かなかったこと、にもかかわらずそれが現在最も影響力を発揮する現象の一つであることを指摘した。いまもしこの論文が新たに書き直されるとすれば、その副題は、さしずめ「近年における注視と現在の強さ」と改められなければならないだろう。少なくともここ数十年の間、ナショナリズムは学者たちの熱いまなざしを一身に集めてきており、その研究の蓄積はすでに膨大な量に達している。現在ナショナリズムについて嘆くとすれば、(バーリンのように)それへの学問的無視に対するしっぺ返しへの激しさをではなく、その学問的蓄積を嘲笑うかのような現実のナショナリズムの“つれなさ”を嘆くのでなければならない。ともあれ、ナショナリズムが現実の世界においても、学問の世界においても“ホット・ゾーン”であることに間違いはない。

近代以降、眠れる民族がナショナリズムによって目覚めたというのは神話に過ぎず、その逆にナショナリズムが民族を創り出したのである—このような認識がもはや格別に社会科学者の耳目をひくことのない“常識”となつてすでに久しい。そして、この“常識”の確立に貢献した者としてB・アンダーソンやE・ホブズボウムらと並んで、本書の著者、アーネスト・ゲルナーの名を欠くことはできない。ゲルナーは人類学や社会哲学などの分野で次々に著作を出版してきたイギリスの社会人類学者であるが、なかでもNations and Nationalism(1983)はそれ以後のナショナリズム研究において最も引用される基本文献の一つとしての地位を、今なお占めている彼の代表作である。

本稿が試みているのは、ゲルナーの最近著"Encounters with Nationalism"の紹介を通じたゲルナーとの対話である。本書は、90年代以降も原理主義やポストモダニズムなどさまざまな思想と対話や論争を試みつつ旺盛な執筆活動を展開してきたゲルナーが、主に書評

という形式を通してさまざまなナショナリズム論を再検討したエッセイ集である。数々のテキストからなるゲルナーの知的経歴は、個別的テーマ（主にナショナリズム）に関する研究と、社会哲学ないし認識論的考察（ただしゲルナーの場合、純粋に哲学的な意味での認識論的問題と言うより、学問と現実の間における認識と倫理、あるいは認識の倫理の問題といった趣きが強いが）という二本の糸が織り合わされる過程でもある。そこでゲルナーとの対話を試みるためには、この二本の糸を同時平行的に手繰ってゆくことが必要になるが、本書は、その二つの糸が一つのテキストの中に織り込まれている点で、恰好のテキストと言えるだろう。以下、できる限り批判的に吟味しながらその糸を解きほぐしてゆくことにしたい。因みに、本書がいつもながらの明晰な文体とボレミカルな議論に満ちていることをも付言しておこう。⁽¹⁾

2 ゲルナー、ナショナリズムに出会う

本書は、1987年に出版された第6章を除き、1989年から1994年の間に、それぞれ別の場所に発表された論文集である。すでにNations and Nationalismにおいてナショナリズムについての独自のモデルを構築したゲルナーが、他のさまざまなナショナリズムあるいはナショナリズム論に対して診断を下すかたちになっている。しかしテーマは必ずしもそれに限られるわけではない。以下、ざっと各章で取り上げられるテーマを紹介しておこう。1章：スプーリックのマルクス主義とナショナリズムをめぐる議論。2：E・H・カーのナショナリズム論。3：ゲルナー自身のナショナリズム・モデルの要約。4：ジュリアン・パンダの知識人論。5：C・C・オブライエンのナショナリズム論。6：マリノフスキーの脱ナショナリズム観。7：トルコの世俗主義。8：アンドレイ・サハロフの思想と生涯。9：マサリクとハベルの思想と政治。10：チェコの哲学者、パトーシュカの思想と政治。11：ハイデガー問題。12：サイド批判。13：ソ連崩壊後の状況分析。

⁽¹⁾ゲルナーの論争好きな性格を示す興味深いエピソードがあるのでここで紹介しておきたい。1959年、ゲルナーはWords and Things なる書物を出版し、その中でウィトゲンシュタインおよび日常言語学派の哲学を徹底的に批判したため、その「部族」から儀礼的に追放されてしまったという。この部族の「族長」であったのは、当時のイギリス哲学界の“ゴッドファーザー”、ギルバート・ライルである。ライルは同書における日常言語学派への「悪口雑言」ゆえ、それを自らが編集していたイギリスの代表的哲学雑誌『マインド』誌上で書評することを拒否したという。代わって同書に序文を寄せたバートランド・ラッセルは、タイムズ紙の投書欄にライルの党派的行為への抗議文を送った。ライルもこれへの反論を寄せ、以後、これはイギリスの知識人を二分する大論争へと発展していった。このエピソードから、流行思想に対してそれを多少挑発しつつ、その欠点や限界を明快に論じるゲルナーの論法が30年以上の歴史を持つものであることが伺える。（ゲルナー『イスラム社会』紀伊国屋書店、1991年、解説p. 475、野家啓一『言語行為の現象学』創草書房、1993年、p. 301～302）

14：チェコの歴史家、M・フロツホのナショナリズム論。ここでこれら全てを論じることには種々の困難があるゆえ、テーマを絞って次の三つの角度からゲルナーの思想の全体像を浮かび上がらせるようにしたい。1. ナショナリズム論およびマルクス主義のそれに対する認識（1、3、14章）。2. ポスト・ナショナリズム時代のヴィジョン（6）。3. 知識人の位置（4、12）。学問と現実世界、認識と倫理の関係を常に意識し続けるゲルナーの思想の拡がりを理解するためには、これら三つのテーマのそれぞれについて検討することが必要と思われる。

3 ナショナリズムとマルクス主義

本書の多くの部分が東欧・旧ソ連地域に何らかの形で関わっている。ゲルナー自身、かつてチェコのプラハで教育を受けたこともあり、近年はとりわけ東欧・旧ソ連地域に関心を寄せていることから、これは自然なことでもある。ここでは、ナショナリズムとマルクス主義の関係について論じた第1および14章を取り上げたい。

さて、マルクス主義にとって民族問題に関する最大のテーマの一つは、歴史の変革の主体は階級と民族のどちらか、というものである。(p.194) 言うまでもなく公式的なマルクス主義の見解によればそれは前者であり、後者は一つの虚偽意識にすぎない。そしてこの公式見解を維持する限りで、マルクス主義は予測を誤り続けてきた。近代史の表面を眺めるかぎり、その主体は民族であった。近年のマルクス主義と民族問題との関係が論じられるとき、このかつての苦い経験が動因＝動機になっていると言える。そしてそれらの試みの例としてゲルナーが取り上げるのがスポールク（Roman Szporluk）やフロツホ（Miroslav Hroch）らの著作である。かれらの理論をゲルナー自身がどのように評価するのだろうか？だがそれを見る前に、ゲルナー自身のナショナリズム理論を見ておいたほうが良いだろう。本書を通じてこの理論がたびたび言及され、またスポールクやフロツホの議論への評価も、この理論と対比しつつなされるからである。彼の理論は本書において、万物の尺度である。そこで、第3章およびNations and nationalismにおける議論を踏まえつつ、ごく簡単にゲルナーの理論を要約しておこう。

一般に前近代の農業社会は少数の支配者と多数の被支配者たる農民に歴然と分かたていた。農業社会における重要な発展は、政治における国家と、文化における文字および聖職者層の出現であった。しかし一般に後者は支配階層の独占的所有物であり、地方の民衆のコミュニケーションは文脈依存的・不可視のものであったために、この政治と文化の二つの要素が結合する傾向は見られなかった。それに対し、近代の産業社会は持続的発展を要

請されるため、適切かつ敏速な労働力配置を可能にしなければならない。このとき労働者は、文脈自由なコミュニケーションを遂行するため、読み書きができ、移動可能かつ匿名的（あるいは同質的）な存在でなければならない。このような労働力を大量に生み出すための制度的工夫が教育システムであり、このシステムを通じて高文化(High Culture)が伝達される。前近代の農業社会から近代化を通じて産業社会へ移行する段階で生じるのが「ナショナリズム」と呼ばれる社会現象である。きわめて乱暴な単純化によってゲルナーの理論を命題として表現するなら、「産業主義がナショナリズムを、そしてナショナリズムがネーションを生み出した」ということになるだろう。この理論からマルクス主義の民族論はどのように診断されることになるのだろうか？

第2章はロマン・スプールックの書『共産主義とナショナリズムーカール・マルクス対フリードリヒ・リスト』（1988）についての書評として1990年に書かれたものである。前述のごとく、マルクス主義は歴史の主役を階級と見る。「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」（『共産党宣言』）というのが、マルクス主義の基本命題の一つであった。ゲルナーはこれを、当時（19世紀初期）の推論としては妥当であったと見る。産業の勃興期、顕在化しつつあったのは、水平的社会関係における紛争ではなく、垂直的社会関係におけるそれであった。それがその後、前者へ傾斜を強めていったのであるが、それはいったい何ゆえか？それがスプールックが追及するテーマである。スプールックはマルクスよりも歴史的眞実に近づき得た者として、リストの名を挙げる。それは次の二つの理由による。（1）個人（個）と人類（類）を媒介するもの（種）としての民族の存在理由が永遠の眞理であることを主張した。（2）民族に特別な重要性を与えることになる産業主義の影響について、より精密な教義を持っていた。リストにとって（1）は（2）にとっての不可欠の前提であるとされたが、ゲルナーはここにおいてリストは誤っていると見る。リスト自身、民族を近代的なものに見なすような箇所もあり、その点スプールックの記述は明確ではないのだが、ともかく、ゲルナーは（1）を通歴史的眞理と見る見解を端的に誤りと考える。

マルクスは『共産党宣言』においてドイツ・ナショナリズムのスポークスマンとしてのリストを名指しで批判しており、実際それは、“反ナショナリスト宣言”でもあった。(p.12)両者ともにレッセ・フェールに否定的でありながら、保護貿易を主張したリストを軽蔑しつつ、マルクスは自由貿易を徹底させることによる社会革命の可能性に賭けるため、アイロニカルにそれを肯定する立場にたった。しかしそれ以降の社会変動は民族を主体として展開され、さらに革命が最初に起こったのはマルクスが予見した先進国イギリスではなく、後進国ロシアであった。結局のところ、近代社会に対する予見性において、リスト

はマルクスよりも優れていた…これが、ゲルナーがスプーロックと共有する結論である。

第14章では、チェコのマルクス主義者、ミロスラブ・フロツホの著作『ヨーロッパにおける民族復興の社会的前提条件』（1985）を取り上げている。フロツホの議論の骨格は、一方における封建主義／絶対主義から資本主義への移行と、他方におけるナショナリズム運動の三段階の発展という、二つの段階論の組み合わせにある。したがって「歴史の主演は階級か民族か？」という例の問に対するフロツホの答は「両方」である。彼はマルクス主義の階級史観への支持を表明する傍ら、ネーションの主観的定義を拒否し、それが独自の存在を持つとして、以下のように主張する。「われわれは近代のネーションの起源は根本的な現実であり、ナショナリズムはそのネーションの存在から生じた現象であるとする。」(p.194) 階級と民族、あるいは資本主義（ないし産業主義）とナショナリズムとは独立事象であり、互いが互いを説明することはなく、したがってどちらか一方を他方に帰す還元主義は否定される。ナショナリズムは、両者が一致した場合にのみ有効なものとなった。「民族性なき階級は盲目であり、階級なき民族性は無力である」(p.197)

ゲルナーによれば、この見解に問題があるとされる。両者（階級と民族）は共に、唯一の移行（農業社会から産業社会への）の諸側面、あるいは産物なのであって、その移行の主要な原動力なのではない。階級も民族も、産業主義の時代に出現し、政治的に重要になり、両者が収斂したとき、境界の変化を生ぜしめたのであった。

残念ながら評者はスプーロックやフロツホの著作を読む機会を未だ得ず、彼らに対するゲルナーの評価に判定を下すわけにはゆかないので、ここでゲルナーのマルクス主義に対する認識およびかれのナショナリズムの理論について、若干コメントしておきたい。ナショナリズムの究極的原因を産業主義と見定め、「われわれはその二つの神話（階級と民族：引用者注）のどちらももはや必要としていない」(p.200)と断言するゲルナーは、ある意味で（もちろんある意味でのみ）、マルクス主義以上にマルクス主義的である。⁽²⁾これは脱産業社会論者にも妥当することだが、マルクス主義を批判する彼らの議論がしばしばマルクス主義の下部構造決定論を継承している（あるいは少なくともそれと親近性を示している）という、逆説的な関係が見られる。そして彼らがマルクス主義以上にマルクス主義的（すなわち下部構造決定論者）であるあるとすれば、おそらくそれは、マルクスが変革の

⁽²⁾注（1）で言及した書物（Words and Things）に対する書評でゲルナーの議論を肯定的に評価した中村秀吉は、次のように言っている。「考えかたとしてはきわめて唯物論的であって、著者ゲルナーはよし正統派マルクス主義者とはいえないとしても、それに近い立場の人であると推定される。」（『日常言語学派への頂門の一針』、『思想』1961年2月号）もちろんゲルナーはマルクス主義者ではないのだが、客観から主観を説明するという意味で、確かに唯物論的、というよりオーソドックスな経験主義の立場である。

主体としての労働者階級の役割を自らの理論に組み入れる必要があるために客観的構造の分析によってその社会理論を閉じることができなかった（その結果が「弁証法的唯物論」として結実することになる）のに対し、ゲルナーや脱産業社会論者にはその必要性がないことによるのであろう（因みにゲルナーは自らを、「ポスト・マルクス主義社会学者」と規定している。p.185）。もしこの推測が正しければ、ゲルナーはかつてマルクス主義に寄せられた批判をも被らざるを得ないだろう。すなわち、「上部構造」の扱い方の問題である。特別な取扱い上の注意を要する“こわれもの”たる上部構造の扱いに対して、旧来のマルクス主義があまりに杜撰であったことは確かである。しかしながら、アルチュセールやレイモンド・ウィリアムズらの理論的再定式化によって、すでに現在のマルクス主義は単純な経済（ないし下部構造）決定論とは無縁である。共に先駆者グラムシに影響を受けつつ、前者は、上部構造に相対的な自律性を認める立場から、イデオロギーが物質的基盤を持ち、階級の再生産機能を果たすこと（「国家のイデオロギー装置」）を、そして後者は文化が、（下部構造の反映された“状態”ではなく）そこでヘゲモニックな闘争が展開される、物質的な社会編成の“過程”であることを論じた。個々の論点に対する賛否およびそれらの民族問題への応用可能性はともかく、それらの試みによって決定論から逃れ、社会科学の視角から上部構造の領域をリアルに問い得る道が開かれたことは確かである。

それに対して、ゲルナーは産業中心主義とも言うべき過度の単純化に陥っていないだろうか？産業主義からナショナリズムを演繹するかのように整合的に組み立てられたゲルナーの理論は確かにエレガントですらあるが、そもそも産業主義（産業社会ではない）がいかなるものであるかの説明に関して、実は必ずしも明確な説明が与えられているわけではないし、また彼の議論が“産業社会の起源”という社会科学上の一大論争点を回避したところから出発していることも想起されねばなるまい。⁽³⁾この回避は、言わば「史的機能主義」とも言うべき立場に立つゲルナーの戦略でもあるのだが、この立場に含まれる問題点を二つ、駆け足で述べておこう。第一に、その社会認識はあまりに静的であり、矛盾を契機とした変動について十分な説明を与えていると言い難い。これは機能主義一般の問題点であるが、それを歴史的過程に適用しようとする場合、なおさらその問題点は顕著になるだろう。先に述べた回避の戦略は、それなりの有効性を有する一方で、やはりそれ相応の限界も合せ持つことを確認しておきたい。第二に、それは歴史的過程の諸局面のもつ固有の相を一切捨象してしまう。例えば、産業主義が均一性を課し、それが最終的にはナショナリズムを生み出したのだとしても、実際にそのような均一性を可能にしたのは出版印刷

⁽³⁾Gellner, E., Nations and Nationalism, p.19

技術である。そのこと自体はゲルナーも認める。⁽⁴⁾そしてそのことはゲルナー的観点からは、おそらく、産業主義を根幹とする近代社会に出版印刷技術が適合的に機能した（あるいはしている）というように説明されられると思われる。だが、必要は必ずしも発明の母ではない。歴史は事後的に見られたときにのみ、必然的に見える。ゲルナーの「ナショナリズム＝産業主義の必然的産物」論は、歴史の過程における偶然的要素の絡まり合いの局面を見落とす結果、歴史必然主義という決定論に陥らないかと危惧するのである。

4 ナショナリズムのオルタナティブ

第6章では、分析の立場から一步踏みだし、ゲルナーの知的先祖の一人、マリノフスキーの思想を紹介するかたちで、ポスト・ナショナリズム時代のヴィジョンが構想されている。マリノフスキーは40年代初頭に書かれた遺作、『自由と文明』において、およそ以下のように論じた。現在の植民地主義に見られる不平等な関係は当然改善されるべきものであるが、およそいかなる民族も自治に適さず、したがって平等な関係は、植民地化された者を脱植民地化すること(decolonizing the colonized)によってではなく、入植者を植民地化すること(colonizing the colonists)によって、すなわちあらゆる者が植民地化されることによって、実現されるべきである。そして、いかなる民族も政治的独立は認められない代わりに、自らの文化を自由に保持することが許される。すなわち最善の統治形態は間接統治であり、そこにおいて各民族は自文化を最も良く生きることができであろう。そのような望ましい間接統治の例こそハプスブルク帝国であった。マリノフスキーは、ハプスブルク帝国を一種の国際連盟(League of Nations)と見なしていた。⁽⁵⁾

このマリノフスキーの思想を、悪意に満ちたものと解釈したり、「反動的」といった単純な言葉で始末してはならないだろう。それは確かに政治的大激変を前にし、それに抗して民族文化を守ろうとするマリノフスキーの切なる願いの表れであっただろう。一般に人

⁽⁴⁾Ibid, p.127

⁽⁵⁾このマリノフスキーの政治思想に対するゲルナーの共感が決して一時的なものでないことは次の発言からも分かる。「彼（マリノフスキー）はハプスブルク帝国や英国の間接統治を賞賛し、両者に共通する要素を見いだしました。つまり両者とも、政治的な独立性は消しながらも、文化的には最大限の自治を奨励したのです。大英帝国において間接統治が真に意味していたのは、マハラジャやシーク教徒が族長たちに儀礼は最大限に奨励するが、しかし彼らの権力は奪い取るということだったのです。つまり、政治的には去勢されたことを気付かなくなるくらい文化的には幸福を感じさせていたのです。わたくしは現在のナショナリズムについても、こうであればと願っております。」（ゲルナー「今日のナショナリズム」『思想』、1993年1月号所収）しかし率直に言って、かつての植民地主義の間接統治と現在の民族紛争との歴史的連関を無視して、いかにして間接統治を賞賛し得るのか、評者は理解に苦しむ。

類学は、“失われつつある旧き良き文化”へのノスタルジーを多かれ少なかれ、その発展の動因＝動機としてきたのだが、この現代人類学の始祖は、ある意味でそれを最も純粋なかたちで提示していたと言える。それは確かに美しい。けれども、このようなノスタルジーが“美しき仮象”を造り上げ、その中に他者を封じ込め、囲い込もうとする機能を果たしてきたことが、人類学の暗部として告発されてきたのではなかったか？このことに気付かされた後の羞恥と戸惑いこそが、現在の人類学を衝き動かしているものであり、マリノフスキー流のノスタルジーに全面的に浸ることはもはや不可能なはずではなかったか？これは何も人類学内部に限られた話ではない。マリノフスキーのノスタルジーが辿った道跡を辿り直すことは、認識と倫理の関係を問う我々にも示唆するところが少なくないからである。

現在、東欧や中東地域で多発する民族紛争を前に、しばしばハプスブルク帝国やオスマン帝国などの多民族政策が（溜め息混じりに？）回顧されることが多い。もちろんそこから学び得ることも少なくないであろう。しかし決して忘れてはならないのは、それらの帝国が民主主義と無縁であったということだ。そもそも間接統治の前提となる政治と文化の峻別ということが果たして可能かという点はここでは措くとして、仮に帝國的間接統治によってあらゆる民族間の平等が達成されたとしても、それは多大な社会階層的な不平等を代償にしてのものである。確かに、ハプスブルク帝国の庇護のもと、各民族は幸福な文化生活を営んでいたかもしれない。「それは諸民族の幼稚園であった」(p.78)だろう。だがそれを望ましい多民族の共存状態と見るのはあまりに温情主義的見解と言うべきである。

「人間が自分の未成年状態から抜け出すこと」^⑥が近代啓蒙主義の課題だったのであってみれば、今日民族紛争を考えると、その傍らで啓蒙と民主主義の問題について考察することを欠くわけにはゆくまい。理念の理想と現実について考慮しない考察は現実的ではない。その観点から更に踏み込んで言うならば、ハプスブルク帝国は来るべき世界連邦の原型でもない。世界連邦とは（帝國的間接統治のような）民主主義の否定によってではなく、むしろ民主主義を国民国家の枠を越えて拡大し、普遍化することによって成立するものであるからだ。

5 知識人の位置

第4章「普遍者の裏切り」（このエッセイは最初、「知識人の裏切りの裏切り」という

^⑥カント、『啓蒙とは何か』岩波文庫、1950年、7頁

題で1990年に発表された）は、ジュリアン・バンダの『知識人の裏切り』（1928）を素材として展開された知識人論である。バンダのこの著作は、近年幾つかの知識人論で取り上げられた書物である。ゲルナーのこのエッセイ以前にはA・フィンケルクロートが『思考の敗北』（1987）において、そして以後ではサイドが『知識人とは何か』（1994）において、それぞれ論じている。なぜバンダのこの著作が現在の知識人論において一つの焦点となっているのだろうか？それを考えるためには、“知識人の裏切りとは何か？”という問いから始めるのが良いだろう。

バンダによれば、知識人の役割とは、直接的、物質的な価値に拘泥することなく、普遍的・形而上学的な価値を追求することであるが、19世紀後半以降の西洋文明の危機は、知識人がこの役割を放棄し、特殊的価値に埋没するようになったことにその原因がある。この役割放棄こそがバンダが“知識人の裏切り”と呼ぶところのものである。言うまでもなく、バンダの知識人論が注目を集める理由は、ポストモダンの嵐を経験した現在の知的状況にバンダの時代のそれと通底するものがあるからである。「『大きな物語』の終焉」論あるいは「歴史の終り」論などの流行を通じて唯一の普遍的な理念の追及という知識人の役割が知識人自らによって否定され、知の多様性・相対性がそれに代わって公準となる時代に、知識人はいったいどこに立つのか？知識人のアイデンティティ・クライシスとも言える状況が、それについての先駆的考察であるバンダの著作に知識人たちの注意を向けさせるものと考えられる。

ゲルナーはこのバンダの知識人論を批判する。バンダの議論は、その主張に反してプラグマティックである。というのも、バンダが知識人が形而上学を遵守すべき理由として挙げているのは状況的なもの（ヨーロッパの内戦）であり、何ら永遠の真理との関連からそれを立証していないからである。それゆえこれは、「知識人の裏切りについて説教する者がまさにその説教の中でその裏切りを犯しするという逆説」（p.51）を示している。その反対に自然主義、プラグマティズム、ロマン主義、非合理主義、相対主義の立場に立つ者の多くは、むしろ合理的・絶対的・普遍的精神を持っていたとされる（その例としてニーチェとウィリアム・ジェームスが論じられる）。このような逆転状況（相対主義者やプラグマティストが普遍的理念に促されてそうなるのに対し、普遍主義者がその主張に反してプラグマティックになるという状況）が存在する中で、知識人の立脚点はどこにあるのか？現代世界はあらゆるものの相互依存性が強まり、複雑性が高まっている。いかなる者もあらゆる情報を得、絶対に正確な判断を下すということが不可能である以上、知識人の責任の領域を規定するのは不可能である。現況がそうであるならば、大切なのは知識人の役割という単純な図式に則って自らの信念を絶対化し、一義的に現実を裁断するのではなく、

不確実な現実に対応し得るよう懐疑精神を保つことである…

結局ここで述べられているのは、現実にはバンダが考えるほど単純ではなく、謙虚な懐疑的態度が必要であるという、まことに謙虚な主張である。このようなゲルナーの態度（おそらくそれはヒュームの影響と思われる）は、ある意味でポストモダンの傾向に似ているが、しかしゲルナー自身がエッセイの中(p.57)で示唆し、そして前著 *Postmodernism, Reason and Religion* (1992) で主張したように、ゲルナーはポストモダンの遊戯的・虚無的態度（と彼が考えるところのもの）とは明確に一線を画している。

ゲルナーのこの議論は、知識人の積極的役割を強力に説くサイドによって批判されることになる（サイド前掲書）が、サイドが激しくゲルナーを批判するとき、おそらくはゲルナーによるサイド批判のエッセイが念頭にあったのかもしれない。そしてそのエッセイが、本書に収められた第12章「(剣)より強いペン—裏返しの植民地主義の二重基準」である。これはもともと1993年にサイドの『文化と帝国主義』に対する書評として書かれたものである。

ゲルナーとサイドの認識は、多くの点で対立を示している。そして両者の対照性は、認識と倫理の関係という、われわれの当面の主題を照らし出すのに役立つ。ゲルナーは、『文化と帝国主義』の著者が帝国主義を批判する際の道徳的基準を、自らと自らの“味方”に適用していないことによって、裏返しの植民地主義に陥っていると批判する。『文化と帝国主義』の中で北アフリカについて論じられた部分を取り上げ、そこに見られる事実解釈の誤りおよび、Ch・R・アジュロンやJ・ベルク、アリ・メラドなど、この地域を論じる上で必ず参照されるべき多くのテキストが無視されているという点を指摘した後で、「具体的なアルジェリアの現実の無視、抽象的テーマの一種の形而上学的投影へのほとんど無制限な耽溺」ゆえに、サイドが、彼自ら非難するところのオリエンタリストであると断定している(p.168)。例えばサイドは、具体的なアルジェリアよりも自分自身のテーマに関心を持っている点で、（アルジェリアに自らの幻影を投影するという“オリエンタリズム”をサイドに非難された）アンドレ・ジッドと同じである、というように。

人類学者として経験的事実を重んじるゲルナーと、知識人の悪弊として専門化（専門領域の知識の特権化とそれ以外の分野に対する無知）を挙げるサイドの議論がどこまで噛み合っているのか、いささか心許ないが、ゲルナーの批判の仕方について言えば、ある理論に対する反論として、「私がフィールドワークする〇×地方ではこの理論は成り立たない」式の実証主義(positivism)的批判を持ち出すのはあまり建設的(positive)批評とは言えないし、とりわけ卓越した理論家でもあるゲルナーには相応しくないであろう。しかしオリエンタリズム批判と人類学（あるいは社会科学）の関係についての一般的議論として見れ

ば、「オリエンタリズム」というレッテル一つで人類学全体をア・プリオリに否定しざるような傾向があるならば、それは知的権威主義という点で自らの敵と選ぶ所がない。この両者の間に立ち、両者の差異を考えることは、社会科学の拠って立つ場所を考えることにつながってゆくだろう。その一例として、アルジェリア独立戦争に身を投じた知識人、フランツ・ファノンに対する両者の評価の違いを見てみよう。

サイドによるファノンへの度重なる言及に対し、ゲルナーは次のように指摘している。「サイドは、ファノンが輸出専門であったことを見逃している。国際レベルでの文学的知的状況ではファノンは確かに影響力があったが、彼はアルジェリア人自身にとってはなものでもなかった。」(p.165) アルジェリアのナショナリズムにおいて、ファノンよりも(国際的には無名だが)はるかに重要であったのはイスラム改革主義組織のリーダー、ベン・バディスであった、というゲルナーの主張は正しい。アルジェリアのナショナリズムを内面的に理解するためには、ファノンよりもベン・バディスについて知らなければならない。だがここで重要なのは、どちらが正しいかではなく、ゲルナーとサイドの間でのファノンに対する評価の違いが、両者のバンダに対する評価の違いとほぼ重なっていることである。つまりそれは、知識人の役割に対する評価の違いに由来している。(ちなみにサイドは、バンダを自らの議論の頼みの綱として一ただし逆説的な意図によって一取り上げている。) 知識人がなすべきことを「生存の問題を越えて、政治的解放の可能性を問うことであり、指導層に批判をつきつけることであり、代替的可能性を示唆すること」⁽⁷⁾と考えるサイドにとって、アルジェリアの声なき民に声を与えようとしたファノンは紛れもなく偉大な知識人であるのに対し、ベン・バディスは“生存の問題”に専念したゆえに、ファノンには劣るということになるだろう。それに対し、常に謙虚な懐疑的精神を持ち、具体的事実即して対象認識に努めることを認識の倫理と考えるゲルナーにとっては、アルジェリアの社会と民衆にとっての現実的重要性という点で、ベン・バディスの方が意義深い人物なのである。このような知識(認識)および知識人をめぐる態度の相違は、そのまま彼ら自身の認識活動の仕方の相違へと跳ね返るであろう。このような彼らの思想と照らし合わせて眺めたとき、彼らの経歴をも真の意味で理解することができるはずである。知識と知識人とは、ダンスとダンサーとの関係に似て、分かち難い。

⁽⁷⁾サイド、『知識人とは何か』平凡社、1995年、72頁

6 おわりにー社会科学の臨界点

認識とは、固定した対象の主観的精神による把握ではない。主観は世界に超越する存在ではなく、客観は主観の認識に一方的に委ねられる“物言わぬ”対象ではない。この事実、社会科学を不安に陥れる。認識の妥当性を保証する確実な根拠はすでに無く、科学的認識と対象世界との素朴な一致が信じられた幸福な時代もかつての話である。このような危機的な地点にまで来った今日の社会科学が存立し得る場所は、まさしくその臨界点を描いて他にはない。そしてそこに立つためには具体的認識の作業と同時にその認識の基盤を同時平行的に遂行する能力（それは一種の“身体的”自己言及化能力である）が必要となるが、ゲルナーはそれを遂行する社会学者の一人であると言えるだろう。この観点から見れば、本書でカー、サハロフ、パトーシュカ、マサリクやハベル、そしてハイデガー…と、学問（ただしハベルは文学）と現実政治との両面にそれぞれ足をかけた知識人たちが取り上げられているのが決して偶然ではないことが理解されるはずである。とりわけ、前年（1989）に他界したサハロフへの実質的なオマージュとなっている第8章「信仰に抗する啓蒙」では、サハロフの中にゲルナーが自らの知識人としての姿（あるいは規範）を幾分なりとも映し見ていることが見て取れ、趣き深い。

ゲルナーの立場は実体的・最終的真理の不在を認めつつも、その認識の方法ないし手続きのみを認識の倫理として絶対化するものであり、それによって相対主義のニヒリズムと原理主義の独断論の双方を退けようとする。⁽⁸⁾「カント的あるいは啓蒙主義的倫理」とも呼ばれるこの立場は基本的には合理主義、そして社会科学を擁護する立場であり、それゆえそれは合理主義＝社会科学を乗り越えようとする者には保守的に映るかもしれない。しかし、彼のこの倫理的立場は決して無難な「中庸の精神」の産物ではなく、あくまでカント的な「批判の精神」の産物なのである。その意味で、彼の倫理はその言明内容にあるというより、言明行為そのものに、すなわち、（例えば本書がその一例であるように）時として学問的禁欲から積極的に逸脱し、現実の複雑な変化に応じつつ、多様な認識の乱立する社会科学の臨界点にあえて立とうとするところにこそある。

（まつうら ゆうすけ・修士課程）

⁽⁸⁾Gellner, E., *Postmodernism, Reason, Religion*, Routledge, 1992, p.84

A quantitative study on the role and meaning of liberal education among university students

Kiyotada TSUTSUI, Jun YOSHIDA, Gentaro MIZUGAKI and Akihiko SATO

Historically liberal education and humanistic culture it offers have been tied up with Japanese higher educational system and have formed a core of elite culture. So at first they had two different characteristics: symbol of the difference from mass culture and preliminaries for advanced education. But the high economic growth in 60's and 70's resulted in prevalence of mass culture and practical mind and changed the characters of elite culture.

In this article we analyze quantitatively on consciousness of contemporary university students in two largest urban areas in Japan. We conclude that they regard liberal education as a basis for specialized education rather than for humanistic culture and that they think they achieve humanistic culture through their company with their friends. Finally we offer several suggestion of this result.

The Critical Point of Social Science

Yusuke MATSUURA

It is not the fact that "sleeping" nations has experienced their awakenings under the nationalism of modern era but , on the contrary , that nationalism has engendered nations. Ernest Gellner is one of the most popular scholars who theorized about nations and nationalism from a perspective of this formulation, and is also the distinguished social scientist who has energetically discussed the epistemological and ethical position of social sciences in the modern social context.

This article is ,as it were, "Encounters with Ernest Gellner" by reviewing his latest book, "Encounters with Nationalism". I discuss his thoughts from three different perspectives ---- theory about nationalism, vision of post nationalism era, social position of the intellectuals. These three perspectives are indispensable for understanding his whole thoughts. But I especially

focus on the third one, contrasting his view of the intellectual with that of Edward Said, because the difference between the two leads us to think about the orientation and epistemological base of social sciences. Thinking it must be critically important in the present intellectual situation where academic knowledge has no longer unquestionable authority.

Gellner postulates rationalism (which gives a theoretical base for social sciences) as the epistemological ethics to evade nihilism of relativism and dogmatism of fundamentalism, both of which are influential in the current European society. But in my view, his ethics lies rather in his attitude that tries to make a stand on the critical point of social sciences where there is epistemological chaos full of conflicts and uncertainties.